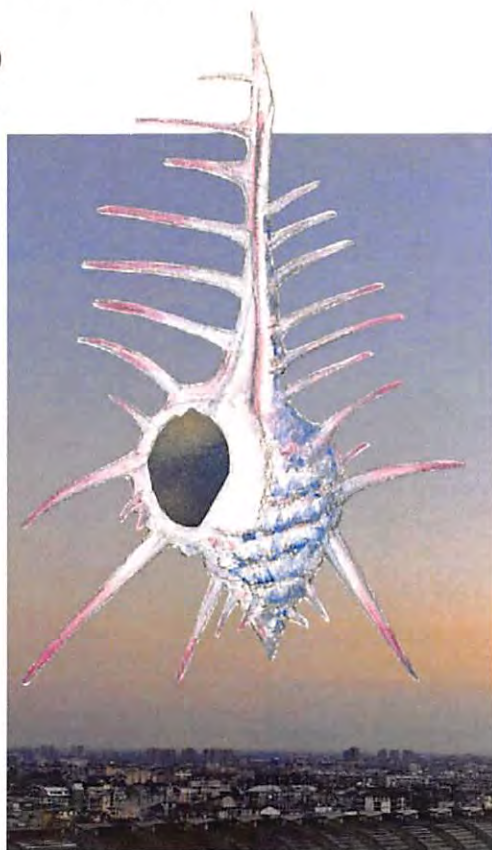


# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2021. 2



令和3年2月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第2号

No.753

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二二年 二月号 (通巻七五三号)

◇今月の二十首詠……白寿の日まで 松浦禎子 2

■作品A 小野雅子・奥田陽子他 4

A 青田不二子他 20

B 朝霧美佐子他 46

C 天野純代他 58

A 鈴木剛之他 72

■オリープ集 片山幸子・上林節江 38

◇今月の二人 綾 央子・久保田歩 16

香川進の生きものの歌 28 田土成彦 14

◆歌めぐり 丸山 修 15

◇シルクロード・カフェ 〔責任編集〕 木村文子 36

■遊覧寄港 〈去来するもの〉 久土目薫 44

■歌壇月旦 玉井綾子 45

岡井隆の追悼

私と短歌との出会い (222) ぐずはらりつ 19

■十二月号作品批評 関根和美・伊東ミイ子 64

A……………

坂上直美・近藤栄昭

B……………小原香里・梅本武義

C……………田中富子

オリープ集……………浜谷久子

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より 〔編集部〕 63

クリップ……………88 神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Yuga

## 白寿の日まで

松浦 禎子

虚子立子この秋天よりご覧あれ星野椿の卒寿の微笑<sup>えみ</sup>を

卒寿まで天衣無縫の句を並べ偉そうな顔も言葉も持たず

会場に隣りてあれば本覚寺の鐘の余韻も しみ入る今日は

孫、星野椿の卒寿祝ぐために若宮大路を虚子ふらふらと

普段着のことばに語る祖父虚子の生を貫く挑戦の意を

あなたは句にわたしはうたに一生かけ一期のえにし結ぶ鎌倉

又の日にと手をにぎりしめ約しきぬ星野椿の白寿の日まで

栄西の開山なりとう寿福寺に幾代越えて鳴く鳥のあり

昭和十一年生まれ。  
昭和三十二年、地中海入社。  
「羊グループ」所屬。  
歌集に「誕生」「春の巡礼」がある。

磯田ひさ子

大丈夫

・森

二十一世紀の癌の治療は花盛り遺伝子 タウインチ ガンマーナイフ  
痛い目に遭ひて知りたり肺葉は右が三つに左は二つ  
世に多くあることなれど生き死にの境を抱へつはぶきの黄  
あいまいに遣り過ごしたる年月の無防備さへもきらきらしきよ  
玄関を浄め目先のひとつづつ励めば心たひらかになる  
やまひ得し夫とわれとの新天地をり合ひをつけ少し楽しく  
新月のま上に北極星光る大丈夫 大丈夫まだ闘へる

市原志郎

冬が来る

・萬

「どっこいしょ」声に出さねば立ち上がる力入らずこの冬の朝  
免許証取りしばかりの孫娘買物に行くをじっと見送る  
寒い風吹くは寂しや今年あと少しにて終わる頃となりたり  
齒ざわりを楽しむ梨の一切れを昨夜も今日もデザートとなす  
リハビリの終わりにて飲むを習いとしコーヒー甘さ控え目にして  
支えくれし妻の手の温みほんのりと伝わりて来る左の肩に  
リハビリを終ればそっと新聞を手渡しくるる妻はやさしく

市原やよひ

秋

・萬

短日の陽をいっぱい浴びよう車椅子の夫を散歩に誘う  
ポインセチア蔭に置きたる夫乗せて車椅子に行く田の中の道  
田の中におちこち残る小き森紅葉しており秋静かなり  
ウーバーイーツみたいいな人の多くいる通勤時間の駅への道は  
馴れて行く馴らされて行くコロナ禍に残りの時間奪われ行くか  
抱え来しポインセチア置く窓辺コロナの一年終わらんとして  
星空はそれでいいじゃないかと思いつつ探査機帰還のニュースを聞き

神田鈴子

秋日

・大

秋空にきりりとそびゆる天守閣紅葉燃ゆる木々を従へ  
唐破風、切妻破風の黒屋根に美しき白壁秋日にまぶし  
天守よりのぞめばはるか霞みたる伊吹の山は泰然とあり  
濃みどりの水たたへたる堀の面ゆ白鷺一羽日に向きて飛ぶ  
さざ波の立てる川面に照り映えてナンキンハゼの朱燃えゐたり  
縁遠き人より届く秋の色箱いづばいの熟柿がにほふ  
折々のメール、電話に励まされほのか明るむ一人ゆく道

菊地栄子

引力

・澁

上り坂辿りて苦しき息を吐く花芽はぐくむ山茶花のもと  
効いている薬か息切れ止まざれば翳り帯びくる旅行プランは  
「何だが解らないところがいいのだ」とカチンとひびく受売りの声  
サイレンを鳴らす二台の引力に容易くなびくバス待つ我等  
外したるメガネはどこぞ探せずに見切り発車の夕べの歩行  
耳遠くなりしと訝る医師の前しどろもどろは寝不足のせい  
ネックレス指輪イヤリング振り落とし何もなき身の軽やかなこと

木村文子

秋

・羊

雨の日の桜もみじに近寄れば桜餅の香なすきに響く  
ももいろの浮き輪のような筋肉をのぼして蚯蚓は草に憩いぬ  
桃色のからだごろんと投げだして溶けゆくみみず  
朝まだき子猫が道のまんなかで篠懸の葉を追って追われ  
腹のなか我も持ちおりももいろの筋肉の束 腸というもの  
もみじ葉は風を待ちいる 天を飛びいまだ見知らぬ地に還るため  
黒々とみみずを抱いて広がりし大地はくまなくアスファルトのした

## 草刈 十郎 深愁 世

放蕩も無頼もわれには無縁なり今宵はひとりにこり酒酌む  
ひと雨ごと秋深みゆきコロナ死者世界百万はるかに超ゆる  
自肅の日つづき心のいやさるる今宵の月をただ仰きをり  
牙をむき言葉の戦ひ果てしなき大統領選果てるのはいつ  
捨棄山子仕事成しとげ空をむき安堵の顔で眠りゐるがに  
名月とふまんまるな月四角なる窓よりひとりわれは見てをり  
しなければならぬ事するはずなのに今日も忘れぬゆく秋の暮

## 國井 節子 小白鳥 春

はるばると長旅を終へ小白鳥志賀の琵琶湖のいつへに眠るや  
波荒く湖水は揺れて鳥の群どこの波間に風を除けるむ  
毎年の常連らしき大鷲が寢座に帰るや羽音たくまし  
四つある琵琶湖の中の多景島は井伊家ゆかりの神やどる島とふ  
樹と岩と塔のそびゆる鳥影を弥生の頃より神の島と呼はるるらし  
夕陽浴び黄金に輝くすすき穂の短き秋のひとときの贅  
山の端に昇りし月も寒からむ大根を煮て温もるとせむ

## 河野 繁子 白き闇 雁

おのずから生えしは枯れず猛暑日を耐えていつしか秋を迎ゆる  
あけほの草花冠に散らす斑点を夜明けの空と見 いま卓の上  
花びらに無数の点画えがき終え一つ一つと蒼のひらく  
もや深くとざす朝の白き闇もだせる樹々も密やかに待つ  
神無月出雲に集う神々の議題は疫病か雨の一日  
てのひらにプログラムされ踊りしが残り少なにすすき手まねく  
十日夜ひかり増したるレモンの黄コロナ禍ひと日何ごともなく

## 小林 能子 時間 羊

病める目に涙の湧きて止まぬなり友の計報に愚痴尽きるなく  
コーラ供へ美智子夫人に近況を柏原宗一の今朝の計報も  
しゆわしゆわとコーラの泡のひらくとき美智子夫人の笑顔顕ちくる  
たかが目の痛みと思へどただ痛く痛くて遥き「氣息安寧」  
入院の手続きも終へ待つうちGOTOトラベルなど横行す  
思ふとも思はむともなく短歌のこと電話に語りあへる幸せ  
永からぬ時間と思へば陽の温み遣されし目も眠り愉しむ

## 近藤 栄昭 スイッチオン 虹

速くない思いで登る紅葉山違ひ登山と昔見ていた  
ゆるめられ東北道に試し乗りトラックの風圧からだ目ざめる  
まといつくコロナをいとい紅葉狩り今年の秋の最低気温に  
コロナ下の籠りの食事は終戦後小麦粉と水ブレインなひら焼き  
注意して雇ってくださいです政府の方針わかりつつあり  
定刻にトラジスタースイッチオンかすれる音声を子鑑賞  
未生の美と仕上げぬままに筆を置く彼も歳なり早く送ろう

## 近藤 芳仙 高瀬川追遠 信

溪谷をたづねむとしてその深き紅葉に遇ひぬゆるかたもなし  
高瀬川のダム湖いくつをたどりゆき懐ふかく迎へられたり  
見上げたるダム湖の高き石積みは今やタクシーのみがゆく徑  
選ばれし者のごとくにタクシーに登れるダム湖閉山近し  
散り際のもみち湖面に映り込み陸と水面のさかひもあらず  
工事用の隧道ぬけてゆく徑のながき吊橋板の透けつつ  
紅葉のひと葉ひと葉の熱をもち楓は楓の赤に染まれり

## 坂上直美 かぐや彦

若い日のことは知らないある日から私は君の唯一の女

「家事全般不得意です」と告げたとき「僕は家政婦をもらう気はない」

「家事全般不得意です」と告げたとき「必要ならば僕がやります」

「人生は修行」と君は言っていただから私と結婚したんだ

もうちょっと修行を続けてほしかった天に帰った私の夫

良き妻ととても言えない私だが楽しい妻と言ってくれてた

「絶対にわしより先に逝くな」とうその約束はちゃんと守った

## 坂出裕子 秋の日

・落

紅葉こうじの森の小道にコロナ禍にふさぐところを遊ばせてゆく

炎天の酷暑に耐へし証あかしとぞくれなぬふかく木の葉燃え立つ

秋の日の光を浴びて花水木もみちかがやく土の面おもてに

公園の路に散り敷く枯れ落ち葉ふみ歩みつつこころ踊れる

炎熱も寒気もひたに受けとめし梅の黄葉もみぢが秋の日に照る

銀色の星がきらめく秋の日の光を浴びてゆく川の水

## 佐久間 晟 思い

・湾

わが歴史手繰れば深き闇もあり優しき母の思い出もあり

思うことつれづれ綴るわが歌に如何なことぶれ示せるものか

下手な歌作り続けて七十年余何かそらぞらしく雲は流れる

春来れば人はそれぞれ動き出す耕す人も木を伐る人も

われのみは何か知らねど家に籠もり役にも立たぬ歌作りいる

何と言う清々しさか今朝の陽にわが一日の思いも清く

せても心の清めと声低く今朝も唱える般若心経

## 佐藤道子 夫在らば

・甲

初めての浅間温泉夫在らば楽しかるらむ湯の町巡る

この宿の大手打ちの信濃蕎麦打ち立てただくこの夏の幸

夕暮の淋しき茜に染まる空家族の鳥か山へ向かへる

松本の街の灯りがみな滲む真夜を山より霧がくるらし

枕辺に真夜をさらりと風が吹く夫かも知れず窓も開けぬに

グーツートラベル次々豪華なホテル泊疲れ果てると思ふ老いの身

夫の為二度咲きくれし百合の花高々とのび実を結びをり

## 鈴木結志 茶道の芸

・福

掛け花のなげ入れ松の枝たわめ芽立させて初春を祝く

仙翁のくれない床しかつがつに鮮麗花と呼ぶ一花が映ゆる

茶筌もて露打ち花に自然美の清浄感の景色を映す

み仏にお茶を供うる習わしの行すなわち茶の道にあり

「一期一会」のはなむけ季の花活けて孫の点前にこころつつしむ

みどり濃く深蒸しの茶の一人に生き身のこころ清くあらしむ

「うてば鳴るたけは響く」茶の湯人の境地に入りて表現を練る

## 関根榮子 立ち話

・埼

秋の野芥子秋のキリン草の群落の枯れゆく空地をわざわざ通る

山形の「もってのほか」を作りしと淡紅の菊友より届く

敷き詰めしごとく団栗落ちておりひもじき熊に送りたきものを

五・六人のランチ会中止の報ありぬ雑談目的にて致し方なし

道端の立ち話また長くなるこの頃人は会話を飢えしか

すれ違う人のマスクの白さゆえ濃くなりて映ゆ冬の夕焼け

自動車道をくぐれば広きすすき原仲秋の名月とうに過ぎおり

## 関根和美

テディベア

・埼

如月に逝きたる友の手作りのテディベアはピアノにわれを見つむる  
たてロールの黒髪美しきひとのまま梅節喜芳信女と消えつ  
酒豪なる君と知らざり生前に共にしたるはランチばかりで  
ふたたびを逢えるはずなき面影にささぐ一献加賀の辛口  
テディベアに友を思いて声かけてリハビリアピアノはじめん今日も  
関節の伸びぬ右手に奏楽をまかすと夕べ神に仕える  
もう寝んと思うにやはりひと口とキッチンに向くわが歩みかな

## 高尾恭子

戻り道

・大

老衰の小柴さん逝きしと速報を母は見ている見ぬふりをする  
クッキーの缶に小銭をためこんで「お金はあるの」と母の口癖  
もつ鍋の昨夜のんにくまだ匂うズーム会議はキッチンの卓  
女ひとり風に押されて発ちゆけりニトリのカーテン、ひとりのソファ  
病室のようなりピング絵はがきをピンナップして友は隠れり  
喧嘩にもならぬとノラは言い放つ鍋焼きうどんをふうふうしつつ  
山門をぐぐれば〈大原三千院〉ひたぐれないに戻り道なし

## 高津砂千子

ふところ

・風

しもつきの末日は忘れられぬ日ぞ母の生まれ日姉の命日  
割烹着姿の母の頸ちくるは少しく気弱になりし時なり  
百回の水をくぐりし割烹着 母のふところふかきやわさよ  
亡き母に声をかけつつ草を引くそのみに屈ぐわれのころは  
あら草の穂絮か虫かふわふわと飛びゆくものの消えてゆくはや  
コロナ禍のうつ吹きとばすおまじないローズマリーの花束作る  
伸びしるきシラカバキリンナイフもてエイツと撥ねたり又増やす為

## 滝田靖子

至福

・新

七枚目の喪中の葉書届きたり誰にも会はないコロナ禍の秋  
会ひたいと思ふ気持ちの薄れゆきもう友人と言へないわたし  
金色の小さき鳥の降る朝を旅立ち行けりさよならさよなら  
医療者は除外と言へばいいものを思はせぶりな Go to Travel  
残業の五時間を超える日の続きナースステーションへらへらして  
ジャケ買いに手に入れし本幾たびも幾たびも読む昼寝も忘れて  
引きこもり過こす休日コロナ禍の恩恵独りきりとふ至福

## 竹下妙子

くれなる

・霧

吹く風にささらとなりし木犀の荒れたる庭にふくいくとにほふ  
物音のたたぬひと日のさびしめり木犀の香を抱きまどろむ  
逆光の黄金の銀杏はわが生とことなる生か輝きふたり  
うとまるる南京黄楸の朴にして冬山彩るはぜのくれなる  
コロナ禍にわれら人界天変地異忍耐の緒も身も萎えむとす  
夕顔の真白く清し蓄いまほつれむとして何思はしむ  
夕つかた雨ふり出でて紅梅は蕾ふくらむ春を知りてか

## 田土成彦

一齒

・宙

生きることたのしいですか紅葉の極まりののち葉をおとしつつ  
今日一齒失ひしこと書き留めてノートを閉ぢるそれだけのこと  
しこのめと曙の間に浮く雲の茜ましゆくビルの狭間に  
カップ麺うましと思ふわが味覚もとよりグルメにあらぬわが生き  
報道をしない自由もあつてコロナのこと温暖化のことバイデンのこと  
無花果を食ひ尽くしたる椋鳥の来ずなりたるも寂しいひとつ  
午前0時になればただちに曜日まで変へるデジタル時計の律儀



田 土 才 惠

篠田桃紅

・宙

研ぎ澄ます一本の線の美墨のいろ篠田桃紅の世界に浸る  
躊躇わず引かれし墨の重なりも生きこし方をひそと語れる  
百歳を越えて筆取るその姿その氣力にも圧倒さるる  
目を見張る桃紅の墨筆さばき枯れ木のようなその姿もて  
ためらわず切り開くもの示す線生きる姿勢よ迷いなき線  
神技のなせる墨線しばらくを見飽くことなく対峙して過ぐ  
「百の譜」の重たき図録いち人の生きざま描き見飽きることなし

玉 井 綾 子

エスカレーター

・羊

人通りなき朝の駅 感知式エスカレーターの鼻歌聞こゆ  
モーターのため息が足を伝いくる感知式エスカレーターの初動  
人のいぬエスカレーターに近付けば上がる速度に巻き込まれる腑  
人の氣に速くなるエスカレーターを横目に階段二段抜かしす  
感知式より古きエスカレーターに抱く安らぎ、労り、信頼  
エスカレーターを歩いて慣性の法則を享受した氣になりぬ  
エスカレーターの降り口乗客は顔をかぶりて一散に消ゆ

虎 谷 信 子

師 走

・伴

紅型の朱を思へり。刻こくうつつろひてゆく 夕映えの朱  
入りつ日に盲ひたるらむ 唐突に、はり戸にぶつかり小鳥落ちたり  
モチの実も 雨天の実もゆたかなり。ものの音せぬ 死角にありて  
晦日夜の早かたづきて 更けてゆく、頃の習ひも 継ぎてゆくべし  
紅白の歌合戦も趣なし。世のうつろひか わがうつろひか  
木箱入りのメロンすがしき 仏壇や。母の忌終へてしばしくつろぐ  
死者の数 連日きくも哀しきよ。コロナ禍のわざ 何時までつづく

中 島 央 子

燕去り月

・森

ただ一度見舞ひしわれも見舞はれし汝もこの世の言葉すくなく  
ウイルスの渦巻くこの世におとうとは病臥の眼にわれを氣遣ふ  
かくて世は過ぐると思ひつ絵心を果せず弟のいのち華んぬ  
脚萎えの妻を残ししおとうとよ孫の二人が車椅子押す  
悲しみを胸うち深く生くべしと遠山脈の白き夕富士  
カーテンを引けばこの手に迂りくる朝光白し燕去り月  
歳月は風より静かに過ぎてゆく長雨はれて今日七七忌

中 島 義 雄

孤 愁

・岡

久びさの電車の吊り革にぶらさがりコロナの齶らす孤独を思ふ  
落ち柿はコロナの土に落ち果てて九十三歳の秋は逝きたり  
霜白く受けて立ちあるわが歌碑に一身分かてる感動もなし  
老齡の極まるるところに行きつきて語りたき人の多きを想ふ  
歌詠めず飯食ふ真昼の箸先が哀しく蒟蒻田楽にふるふ  
歌成らぬゆゑつきつきと掛けて聴くサムテイラーのテナーサククス  
サムテイラーのサククス聴けばかぎりなく甘く頭ちくる幻の友

永 塚 節 子

有 明

・銀

GOTOを楽しむ人ら駅前へ新型コロナの収束遠し  
GOTOのお陰と友のメールには松茸料理と温泉三昧  
補助あればこの時こそと格安のホテル旅館は見向きもされず  
GOTOは富者への税の無駄使い暮しの立たぬ人の多きに  
ワクチンは打ちたくないといふと伝えれば医師は即座に「僕も否だね」  
高齢に基礎疾患とうアキレス腱いましてばらくを大事大事に  
良きことを告げているらし有明の空にぼっかり大いなる月

萩 葉 子 とんぼのトレー ．銀

初秋のオールドバカラ展最終日やっとなあ「とんぼのトレー」  
 「元氣か」と兄の電話の第一声父に似ている低めの語り口  
 ふるさとの駅階段をおりるときよぎる横顔あなたはいない  
 緑道の小さな流れに飛んでくると白鷺いち羽となりてさびしも  
 陸橋から手を振るわれらに機関士さん応えてくれし手を振りて  
 子供の頃とびはねていた水溜まり避けて通りぬシニアになりて  
 国道をわたりて登る不動坂家族で毎年桜みている

白 子 れ い 若き日 ．洛

前に舞い背に散りくる桜葉に鼓舞され朝の歩み速まる  
 お詣りをすませて仰ぐ西の空朝虹すつきり幸せをよぶ  
 いつしかに子鷺の姿なくなりて水面に泛ぶは番の合鴨  
 楽しげな施設の様子書かれたる姉の葉書にホッとひと息  
 訪いたきもコロナ邪麗する明け暮れにただ祈るのみ施設の姉を  
 若き日は前ゆく人に追いつきて追い越したるも今はその逆  
 齢だからと己に甘くなりきたる心に纏うち仰ぐ青空

ば ば り よ う こ ．鹿

「足立さんはレンプラントに似てますね」「あ、それはうれしい」会話の記憶  
 白樺の木で彫られたる鮭一尾くち喘ぎつつ北を恋いいる  
 十一月早やも新年のカレンダー 喪中のハガキ 明暗錯綜  
 逃げ足の早き月日よ コロナ禍を置き去りにするな 疾くつれゆけよ  
 「あっけらかん」の隠れ蓑を見破られ背撫でられました ただに黙って  
 たましいは我を抜け出し公園のブランコに乗り振り向き笑う  
 花よりの使者とし尊ぶ男女いて病む庭に花群れ遊ばせ給う

浜 谷 久 子 遅れ来て ．地

コスモスの咲き終わる頃遅れ来て背丈小さく咲き初めるもの  
 植え初めはいつだったろうコスモスの自生の畑の今に続いて  
 紅、白の花びら変種の生れる畑コスモス一面風に吹かれる  
 花束を贈れぬ人にコスモスの画面いっばい届ける季節  
 コスモスは種を鏝と実らせて落として傾ぐ一年草の  
 コスモスの枯れゆく畑を背々と育つ大根水菜小松菜  
 一輪を挿す秋コスモス白色の花びら落ちるまでの四、五日

浜 本 芙 美 高砂ゆり ．夢

台風のちかづく予報に鉢植えの高砂ゆりをとにかく取り込む  
 裸婦一点風景画など在于し日の君を偲ばんよすがとなりぬ  
 蒲団の中身綿でなくウール遠き日彼の店のすすめくれたり  
 ただただ作歌に夢中のかげにして失いしものもあまたあるならん  
 何をしても手際よき景子さんわれにもそんな日月ありしか  
 今にして思えば何事もほどほどと一言葉の重みだに輝く  
 あらくさのそよぎが涼よぶ梅雨さなな思いははるけき城辺の旅

檜 垣 美 保 子 半月 ．昴

さざんかの垣根に数十の花の紅ふゆのあしたを奔放に咲く  
 くすのきの小枝をつきつき口に折り落とす鴉の所業見上げて  
 刈られたる緑地帯にのこされて師走のたんぼば咲けり黄の花  
 カーテンを閉ざしたるままストーブの火を抱くこく座るひとの背  
 低く髪まとめたるひとの髪留めは透かし模様は花の連なる  
 ひとがひとを温むることたしかかなり叔父なきあとと叔母の手冷ゆる  
 すれちがう記憶のあればすれちがうことたどりつつ半月の夜

福田庸子

黒千石

・今

幾世紀を北の原野に種を保つ小粒黒豆つやめき染みる  
この世にて果たす役目を示したる千石黒大豆の艶豊かなり  
乾きたる莢をはじきて飛びいだす豆の勢ひに負けたる我は  
五ヶ月後つづら実成してこぼれ落つ性見事なり小粒黒豆  
夏の暑さに命濃くせる主なり糸太と吐きゆく蜘蛛は  
したたかに根株太らせ生き継げる背高泡立草は大陸の草  
黄の色をふりこぼしてや島国を踏破してゆく大陸の草

藤田美智子

待宵の月

・新

知らんぶりする幼子の鼻先はふたたびかかるとも思へり  
初音琴音 名前に響きもつ児らの優しかりしをふとも思へり  
神木に結びしはとうにちぎれるむ(待ち人來たらず)とありし御神籤  
待宵の月が中天にかかりたり君の心音聴きたくなりぬ  
紙で切りたる指に痛みが残ることささいな傷をわれは引きずる  
思ひもかけぬ結末を知る主演女優の見せし目力の強き理由を  
見つけたる獲物ひたすら追ふごとき眼に走る新谷仁美は

藤森巳行

柏原さん

・銀

雲ひとつ無き背空を仰ぎたり突然届いた柏原さんの訃報  
鎌倉はあの方角が背空に向かひ合掌冥福祈る  
優しかりし柏原さんの面影を浮かべ追善の題目送る  
こだはりは灘の銘酒菊正宗、バーバリーのコートジャケットマフラー  
ダンディな柏原さんがやつて来る神田駅より本社に向かひ  
酒飲んだ思ひ出多く甦る神田大宮東京駅で  
地中海を背負はず逃げたと酒飲んで責めたるのが今悔やまれる

船田清子

ベビー・リーフ

・天

怠りし水やり故や柗の蕾まららに白き塩豆  
球頭の開きて香りそむるらし街中の木も同じ定め  
ひそかなる初冬の香り漂はず半月ばかり中天に牙ゆ  
君の笑顔まなうらにして巨人軍の日本シリーズ折るも空し  
翔猿の跳ぬ飛び技の痛快さあの俊敏なる若さ羨しも  
小さきには大の持たざる強さあり若さにはなき老の強さは?  
多肉なるベビー・リーフの側面ゆ親さながらの葉と根伸び出で

牧雄彦

比叡山

・大

はらはらと舞ふさくら葉を目に追へば光と影が参道に落つ  
見はるかす京の町並み秋の日があまねく差して物音もせず  
崩れたる石塔もあり木漏れ日を受けて静かにならびてゐたり  
並みいますあまた石仏目・鼻・口さだかならねど微笑みたまふ  
叡山ゆ見放くる果てにみづうみが夕づく秋の日差しにひかる  
くくくくくーと山鳩の声絶え間なし秋の日すでに傾きたるなり  
足裏にやさしき落ち葉踏みしめて比叡の山をくだる夕ぐれ

松浦禎子

円覚寺

・羊

蘇生外科治療終えたる柏楨の大樹生き継ぐコロナの地上  
ビヤクシンより少しさかりて聴くものか歳月問わぬいのちの在り処  
コロナ禍に仏殿の扉の一つ開き無字祖元の片頬ゆるむ  
制服のままに並びし幾十人坐禅終えたる庭にすがしく  
ミイ子さんのカメラの中に納まりしいつかのちのみじこの妙香池  
裏山の中腹に音なき蔵六庵雲水ひとりお出ましの昼  
杉皮に仕立てし柵の木戸あけてたすねゆきたきひとりありたる

松永智子 音

・嵐

ものの音いまだにあらず覺めてきく白き病室のこの間の音  
 ひとの声ものの音の絶えし夜半病棟長し音のなきまま  
 夜の勤務終へし人らの声低く交はしゆきたるのちの静寂  
 個室の灯ともしもの書くあかときいまだ音なく月かたぶきぬ  
 闘病の一語におのれ托すべくことばにとほし朝の足音  
 夜のつとめ終へし人らの交はす声徐徐に小さく遠くなりたり  
 むしタオル受けとり顔に当つるときたたかひにとほく一日の始まり

三浦好博

社会軸

・銚

小春日の船溜まりに來しあそこもプラスチックのスープが満ちる  
 文明度を日々測られぬ世に做ひ我も弱者を蔑せしなるか  
 ああ空気読まない奴だと思ふことありき同調圧力かけて  
 政治なんか作品にせず詠むならば心洗はるものにしなさい  
 わたくしは社会軸からずれてゐむそが罪になる世が来るのか  
 みな同じ考へに染めて行く政治はみ出し者の我チャップリン  
 分断の言葉が刺さり來て不快ネットウヨ、パヨク、ヘイト、ディストピア

宮本靖彦

埋骨式

・凌

さらさらと骨壺ゆこほす父母の骨海を眺むる丘に安かれ  
 父母の埋骨式を千葉に病む妹に告ぐれば涙湧き出づ  
 桜紅葉耀ふ朝腺病質と言はれし我も米寿を迎ふ  
 終の花白く咲く初冬の日民主主義勝ちトランプ敗る  
 かたばみの緋色集むる家の主人朝のおつとめ鐘音高し  
 はね上ぐる習字のさまに主の字を朱色に毫す落日の雲  
 華やかに生誕祝ふディスプレイマスクに足止むる人のすくなし

三好聖三

からっぽ

・伊

むきこがし囲炉裏辺に食う従弟らと遊びまわりしあとのまどいに  
 花誼しほどではないがおおらかに咲けばおのずと仰ぐひまわり  
 わが生れし聚落の形の一つにて激しく巖を撃ちつける波  
 『来るべき書物』の上を飛ぶ蠅に猫がざわつく秋 きんようび  
 安医師の足跡を追う一日なり椽もみじがしきりに落ちる  
 いつもなら利発な少女ひとりきり孤児院行きの列車に伏せる  
 十六夜をながめるようにならびおり灰色・三毛に黒白の猫

御代田澄江

涙さしくむ

・茨

温水プール片道泳げば息あがる無理はならぬの医師の言思ふ  
 プランターの蜜柑がほんのり色づきて我の心もほのか明るむ  
 トイレットペーパーの中芯に斜文書きありてここにも働く人あり感謝する  
 バイデンさん余裕の笑みと見えをりぬ常に笑顔を絶やさぬ人か  
 四十年続きし親鸞の会解散さる別れとお礼言ふと杖つきて行く  
 これよりは独りにて読む歎異抄今に始まりし事にはあらねど  
 さみしきは後より來たりラジオに聞く五木寛之氏の声に涙さしくむ

茂木

斌

義弟逝く

・埼

旅先の朝に鳴りたるケイタイの義弟の死をば告げて悲しも  
 余命ひと月の宣告受けしその日より耐へ八か月生の果てなり  
 義弟を弱め蝕み苛みしつらき因とし肝臓癌の  
 肝臓癌すでに手術もかなはずりステージ4と告げられたりと  
 肝臓の腫れとはいかなるものなるか抗がん剤の日々八か月  
 体躯頑健働きつめに働きし義弟を襲ふ肝臓がんは  
 高壇の遺影の笑みもおだやかに逝きし義弟の悔しからんや

もとむらしげと

山査子

・そ

口げんかして別れしに再会の朝のまなざし温かかりき  
わが眼鏡曇りていしか喧嘩して初めて知りし君の心根  
ぶれること厭わぬ心しなやかに是々非々を求めゆきたし  
年とりて許せることも年とれど許せぬこともわが度量なり  
俯敵すれば大海をゆく船ならむ小さき蛇行もわれのゆく道  
「整のうへ」生徒がよめば静寂を破りて窓下をゆく人の声  
いねむりの子の俯せる窓の席伸ばせばとどく山査子の実に

八乙女由朗

柚子

・柴

地の上に生きよと土方もなしたれど行かねばならぬ宇宙空間  
あべこべのコロナの年を実をつけし柚子十六個予は満足じや  
相換取りののろき唄など聞くあわれわれに残れり「日本のうた」  
二十年乗りたる自動車手ばなせば灯し去るなり角を曲りて  
寺に生まれ寺に生きたり幾星霜俗の世間を恋おしみな  
「聚楽」にて同宿なしし柏原静けきままに去りゆきしかな  
急ぎゆく友らが多し寺の子に生まれしわれに命預けて

山下雅子

マスク

・習

気休めのたかがマスクと思いが予備まで持てり今日より師走  
白のみにあらずいろ柄とりどり増ゆいつの間やら慶弔用まで  
ファッションショウに思わぬ出番のマスクならんじわりじわりと何かが変わる  
思うまま話す笑う会食す尊きものの遠のく怖さ  
あなどれぬコロナに気力体力を失いたくなし蜚居いつまで  
ありのまま齢重ねて九十年午年とても馬齢といわす  
さむざむとあらわを曝す桜木は釣瓶落しの間に吸われぬ

山野幸司

蟻

・沖

夏蝶を引きて葬列蟻の行く死はいつの日かかく訪れん  
生き生きと蟻さまよえるテーブルに置かれしままの菓子的一片  
アリさんと孫の声高き道の上影おだやかに薄れゆくかな  
一日が孫と始まり孫と終う二〇二〇年師走過ぎゆく  
中庭に張る芝強く青々と猫は来たれり寝転びて行く  
行く秋の愛しみ落とすやマモミジ孫のてのひらかわゆく開く  
冬の陽を逃がさぬようにわが布団そとと疊みて部屋に持ち来る

横田敏子

雪を待つ

・福

包丁を入れてざっくり手に割きし白菜の芯のまばゆき黄色  
小春日の続く霜月青空を叩けばキーンと音聞こゆるや  
小春日の夕べの空の透きとおる一枚のみじがひらり風とたわむる  
散ることを忘れたような一枚の雪もみじがひらり風とたわむる  
料理番組メモしてさっそくスパーへ今宵はきのこたっぶりの鍋  
大瓶は円錐形の雪吊の中に鎮座し雪を待ちおり  
白きものはらりはらりと落ちてくる低き空なり今日から師走

吉永惟昭

皇帝ダリア

・熊

今年もまた仰ぐ頭上に咲きくれし皇帝という名を持つダリア  
台風の倒せる君に添木なすよくぞ復活歪みたるまま  
神無月は文余なりしに霜の月五尺伸ばしぬ花芽もつけて  
花びらの厚ければ落つ「ふうわり」と待ちあぐねる小春日お昼  
車椅子のスロープに散る花びらを蹴やれば跡に残る水滴  
暖冬といえど季を知る皇帝のダリアは霜に咲きて散りゆく  
多年草何時まで咲き継ぎくれるのか十年経しこの皇帝ダリア

三木 まり 吹く

・昂

久々に詩のことばに触れる朝身に満ちくる湖のなみだよ  
 詩のことばに遠く暮らせば蒼々と暮れる夕への雲を見送る  
 蒼くあおく澄みわたる冬の朝なら乾いた風がまた吹き上がる

久我 田鶴子 夕陽

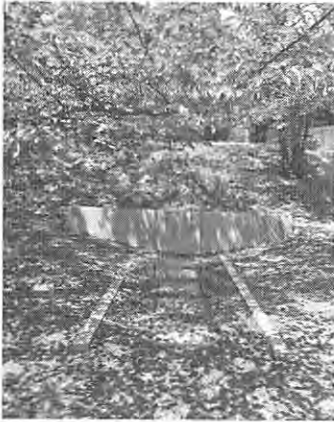
・羊

室内を手押し車に移動する母がぼろぼろこぼす歲月

とげとげの葉にとぎされしひひらきに十一月は白きがかをる  
 晩秋の桜の枝の小宇宙小隊なせるエナガ憩はず

長テーブルにかかはりもなく喰らふ人「家族ゲーム」をはみでるシーン  
 愛新覚羅溥儀飯寓を左にしまとも夕陽まなこをつぶす

海に向く鳥居が西日のなかにあり応答セヨ、アマ：テラス、アマ：ピエ  
 甘えから裏切りまでのひとつ飛び 信を失くさば明日からどうする



桃陵公園の歌碑全景

香川進の生きものの歌 28 田土 成彦

・蟬しぐれ椰子に鳴る日々溜めおきし妻の手紙をいだし読み  
 つく 『印度の門』より

『印度の門』は昭和三六年の出版とあるから、まだ戦後の色濃く残っているころの海外出張時の作だ。経済人として最前線で活躍されていたまさに壮年期の香川進の一面を垣間見ることが出来る。場所は歌の前年から東南アジア、タイやビルマ方面であろう。そのあたりの蟬がどんな種類なのかはわからないが、たぶん日本のアブラゼミ系統を想像すればよいのかと思う。

長期の海外出張とあれば、日本からの美智子夫人のエアメールも溜まってきたのだろう。普段の多忙さにゆっくり読む暇もなかったものを、何かのいとまにゆっくりと取り出して何回も読み返している様子が手に取るようだ。「子を持たぬかなしさ」にいま襲われて眠くらまればかりに日のあり」などの歌が近くに見られるが、家庭人としての香川進の美智子夫人への思いが素直に表現されている。現今ではスカイブとか何々とかのインターネットを利用した手段があるが、当時では手紙と電話だけの甚だもどかしい交信手段しかなかった。五十年というのは確かに隔世の感があるが人を思う心には何ら変わるところがない。ポケットに潜ませていた妻からの手紙を取り出して何回も繰り返して読む香川進の姿に大きな親しみを覚える。

## 歌めぐり

桜の花

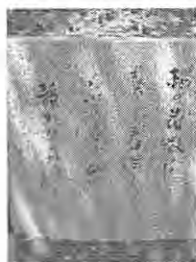
散るとしもなく

春深き

ふるさとの山は

静かなるかな

香川進



丸山 修

六月二日に仕事で香川県多度津町に出張した。昨年の全国大会の際、同じテーブルに座った香川県の「桜の会」の皆様から「多度津の桃陵公園には香川進の歌碑がある」と伺っていたので、早朝に出発して、午後からの仕事の打ち合わせの前に訪ねてみた。

桃陵公園は桜が多く、新緑満載の丘の上にある。春の桜の開花のころは地元の人を中心に賑わう様子が想像される。石垣と階段が多く、この先にほんとに歌碑があるのかと思いつながらひたすら上を目指して坂をあがる。頂上の広場の片隅に小さな看板を見つけた。歌碑を目標に歩いていたので、この看板を見つけることができたが、この公園を訪れる多くの人は気づかないのではなからうか。

その看板から少し人気がない方向へ歩いて約50メートル、歌碑を見つけた。案内の小さな看板の印象とは違い、アプローチのある立派な歌碑だ。地中海に入会後、歌碑を意識しながら町を歩くようになった。今まで見つけた歌碑の中でもかなり立派で、この歌碑に携わった皆様の思いが伝わる穏やかではあるがしっかりとした歌碑だ。歌碑に向かって左側の木の根元に定礎石があり、地中海の方の名前も刻まれている。

地中海誌に連載されている「香川進の生きものの歌」で紹介される歌は対象を鋭く観察し、作者の死生観が色濃く表現されている緊張感のある歌が多いと感じる。一方、この歌はゆったりとした穏やかで静かな一首だ。さまざまに悩み、作歌していた中でふるさとの山はそんなこだわりを捨て素直になれるひと時をもたしてくれたのではないだろうか。

私は現代短歌について何の知識もなく地中海に入会した。「香川進」という名前も入会後に知った。現代短歌に関する書物を読むと必ず登場するような人だと知った。口語自由律から定型へと様々な表現方法を探求された方だと知った。写真を拝見する限り、口を真一文字に結んだ表情、少し角ばった顔の輪郭に何か近寄りたいたいものを感じる。遅くなったが、これから歌集を入手し、作歌された順に作品を味わっていきたく思っている。

多度津町は四国の鉄道の発祥の地で瀬戸大橋を渡る特急がこの駅で高知方面、松山方面へ分岐する鉄道の要所になっている。駅から二キロほど北に歩くと多度津港があり、四国の中でも早い時代から発展したであろうこの町にも長い歴史がある。

なぜか少林寺拳法発祥の地でもある。街を歩くと幕末の刀傷の残る江戸時代の商家があったり、おそらく宿場だったと推測される手すりや格子の残る建物が残っていたりする。幕末の熱気はこの地にもあった。四国山脈を挟んで南には土佐藩があり、坂本龍馬がいたわけだから、当然かと思いつつ、鉄道もなかった幕末にはその熱気がどれだけの時間をかけてどんなふうになつたのだろうかと考えながら桃陵公園から駅の間を迷い迷い歩き回った。長時間歩き続けることは疲れることだけれど、こうして歌碑を見つけて、しばし立ち止まり、休憩しながら、思いを巡らせる時間を楽しんでいきたい。

## 今月の二人

### 時蕎麦

綾 央子

港へのバス代ドルが足りぬのに互いの誤解で釣りまでもらい夫いわく「時蕎麦」もどきがニュージーで予期せずおこる世界は狭いひたすらにピサの斜塔に上りゆく塔にならいて傾きながらカプリ島レーサー気取りの運転手せまい街並みスピード怖し「カンタベリー」ランチに集う人達にパンタベリと夫一氣に和みフランスの「ムーラン・ルージュ」美男美女半裸の踊り目が釘付けに九份で願ひ書かれた天燈ランタンは空一面の神への直訴温暖化ノアの方舟にならぬかと危惧するわれはクーラーの部屋初恋の人の住まいし家の傍ときめき通るもしやあるかと冬の日枯れて見えたる紫陽花が春のさ庭に青々と立つ目の前を水跳ねあげて走り去る車は知らぬ跡のことまで庭の隅捨て置かれたる鉢のなかミニ薔薇一輪いじをみせおりアメリカの砂塵の酷い西部でもマスク禁止が今は奨励

### コロナ禍に思う

早いもので「地中海」に入会して六年目になるうとしています。古稀をまえに認知症の予防に最適ではと軽く考えて入会しましたが、年ふる程にそんな甘いもんじやないと、思い知らされています。

この春から新型コロナウイルスのパンデミックで各国との往来もできず、ロックダウンの都市まであり、その中にはかつてなんの支障もなく訪れ楽しんだ都市もありました。

昨年のイタリアでは、私達一行を見るとなぜ日本人と判るのか「こんにちは」とあちこちで気軽に声をかけてくれました。ところがコロナ禍の今、アジア人というだけで冷たい目を向けられ、暴力をふるわれる事もあるそうです。コロナ禍がいかに人間性を奪うか恐ろしい事で、早い収束を願うばかりです。

いまや百歳以上の人が全国で八万余もいる時代、来年後期高齢者の仲間入りする私などまだ二十年は大丈夫と信じて、頭も心も柔らかくして作歌に励んでいたらと思っています。



## 今月の二人

### 山からの学び

久保田 歩

明朝は三時に起きよと念じればカラスが反応鳴いて手助け  
頂上で温かいもの食べたいと更に早起き荷物は重く

紅葉の混雑予想に起床二時車の無さに皆拍子抜け

頂上から雲海見えると情報も登山口にてもう見え満足

グラデーション山全体が織りなすも山道入れば美しさ知らず

チングルマ仲良く明るく咲く姿に台湾の陳一家を思う

山頂の道標倒れて椅子となる新たな道を自ら開拓

山頂五度の予報にビビりしこたまの防寒具持つもほとんど使わず

ニリンソウのお陰でわかった帰りのルート買って出てくれた道標の役

草のない赤土の上に三角山こだけ見せてエジプトと騙し

青空を一面覆い尽くす雲独り占めできるご褒美得たのか

時間外ぬるくて良いならとおかみさん汗で冷えてか全然入れぬ

十キロの道に体重減る兆しも美味しいものがプラマイゼロに

### 山での積み重ね

二〇一四年以来、二回目の執筆となりました。前回からの変化は、登山をするようになったことです。昨年より始め、春から秋にかけて月一回は登っています。それにより、毎月の短歌も登山三昧になっており、今回も登山を題にしてみました。

登山はもともとずっとやってみたかったのですが、なかなか機会がなく、どうすれば始められるのかもわかりませんでした。運良くグループを見つけたことができ、いろいろと尋ねてみたことで、以前は他人任せだったルートの考案や、地図を見ながら歩くことも自らできるようになりました。

山では四季折々、自然の美しさはもちろん感じますが、ご年配の方のお元氣な登山姿を拝見し、感服しています。カラフルなウェアに身を包んでいるからか、好奇心の旺盛さも伝わってきて、それが活力の源なのかとも感じます。私はそこまで高い山には登っていませんし、高い山の登山はできると思っていなかったのですが、ご年配の方の行動力から、目標を決めて目指していけば、名だたる山も登れるようになるかもしれないと思うようになりました。今後、もっとたくさん探究していきたいと思えます。

◆今月の二人・綾 夫子作品評◆  
空一面の神への直訴

今回は二度目の登場の二人。綾さんは坂出市在住。前回は地中海旅行詠だったが、今回はコロナ禍のなかで、嘗て行かれた旅を思い起こしておられるようだ。

・港へのバス代ドルが足りぬのに互いの誤解で釣りまでもらい旅先では、こんな「時蕎麦」もどきの出来事もあったという。こんなふうには、すぐに「時蕎麦」を思い出して笑いの種にしてしまう夫との旅。どこへ行っても笑いが絶えなかっただろう。

・「カンタベリー」ランチに集う人達にパンタベリと夫一気に和み

「カンタベリー」から「パンタベリ」。またまた夫のダジャレが炸裂。旅先での緊張も一気に解れたか。

・九份で願ひ書かれた天燈は空一面の神への直訴  
これは九份での出来事。願ひ書の書かれたランタンが夜空を埋めるように明るく漂う光景、それを「神への直訴」と捉えたところが面白い。たくさんの人々に混じって見上げた一夜のランタンだったはずだ。

・庭の隅捨て置かれた鉢のなかミニ薔薇一輪いじをみせおり  
コロナ禍のなかで見ることからなのか、庭の隅に捨て置かれてもなお咲く薔薇に、一輪の気概を見せられ共感している。

・アメリカの砂塵の酷い西部でもマスク禁止が今は奨励  
酷い砂塵の中でもマスク禁止だったアメリカ西部（綾さんが現地では、何故?と思ったことでもあったのだろう）。それが今や禁止どころか奨励されているという。コロナ禍により、世界の仕組みも人々の考え方も変わらざるを得なくなっている。

◆今月の二人・久保田 歩作品評◆  
一面覆い尽くす雲独り占め

評者・久我田鶴子

久保田さんは仙台市在住。一回目の登場場からの変化について、登山をするようになったことを挙げている。今回の一連は、紅葉の山への山行レポートのようだ。

・明朝は三時に起きよと念じればカラスが反応鳴いて手助け  
・紅葉の混雑予想に起床二時車の無さに皆拍子抜け

三時起床は、紅葉シーズンの車の渋滞を予想して二時に繰り上げられたようだが、出かけてみれば何の事は無い。スムーズに走れて喜んでいいところを皆で拍子抜けしたという。

・グラデーション山全体が織りなすも山道入れば美しさ知らず  
離れて見ていけば山全体を織りなす紅葉のグラデーションが見えていたが、山道に入ってしまったえば見えない。歩くのに精一杯で、周りを見る余裕もなくなってしまうのかもしれない。

・チングルマ仲良く明るく咲く姿に台湾の陳一家を思う  
チングルマは、咲き終わった後の穂の形から「稚児車（ちごぐるま）」↓「チングルマ」と名づけられたようだ。花は白くて可憐。中央の蕊の黄色とも葉の緑ともよく映える。地面に這うように群生し花を咲かせる。その「仲良く明るく」い姿に、台湾の陳一家のことを思ったというのが独特。久保田さんの行動範囲や、台湾の一家との交流も想像される。

・青空を一面覆い尽くす雲独り占めできるご褒美得たのか  
青空を／一面覆い／尽くす雲／独り占めできる／ご褒美得たのか、と区切れる。青空の方が紅葉が映えそうだが、それを見たかった訳ではなさそう。空を覆い尽くす雲を独り占めできる。それを「ご褒美」と捉えるのが久保田さんであるらしい。

私は、鹿児島県の離島・種子島の片田舎に二人姉妹の末っ子として生まれました。団塊の世代の真っただ中、同級生、先輩、後輩、一緒に遊ぶ人、遊ぶ場所にも事欠かない中で毎日を謳歌しておりました。そのような日々、短歌との衝撃的な出会いをしたのが中学生の時でした。

私の唯一の習い事が書道でした。教師をしていた父の従兄弟が書道家でもあり、我が家で教えてもらっていました。ある時、習い事の事はすっかり忘れ友人と一緒に遊ぶ約束をして、夕暮れまで存分に遊び家に帰ると、玄関先で仁王立ちになっている父が「習いたくないなら習いたくないと言えないのか」と怒り、私の手を引き庭の大きなイヌマキの木に縄で括りつけられたのです。私は大声を張り上げて、歌を歌い、道行く人にアピールしたのですが、大人たちはみな笑いながら通り過ぎていくのでした。やがて祖母が近づいてきて「お父さんにちゃんと謝るんだよ。」と縄をほどいてくれました。

父に、約束を守らなかったことやなんでも先延ばしにしていることを詫び、自分の部屋に行きました。小さな私の部屋の正面に壁に貼られているものがありました。

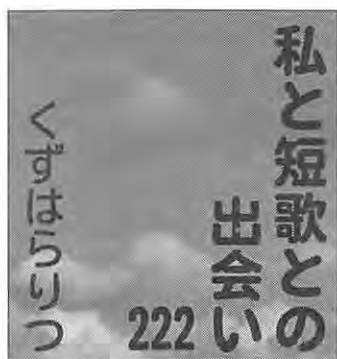
・明日ありと思う心の仇桜夜半に嵐の吹か

ぬものかは

ズシーンと胸に刺されました。

短歌の力を思い知らされたのでした。それから三十一文字を指折りながら、誰にも見せるでもない自己満足の世界に浸っておりました。

昭和五十二年看護師としての生活がスタート。私が勤めていた鹿児島市内の病院に入



院中の男性の患者さんが、病床でいつも小冊子を読んでおられるので気にかかりつい声をかけたのです。

「何の雑誌ですか？いつも穏やかな表情で読んでおられるので…」  
「これは短歌誌で地中海という結社が出版している本ですよ。」

「短歌誌ですか？私にも読ませてくださ

い。」

胸の高鳴りを抑えつつ切り出しました。

「どうぞ、どうぞ」

こうして地中海誌に出会い、故有村清二氏の勧めで地中海に人会させていただいたのが昭和の終わりのころの事でした。

月一回の歌会への出席もままならないことも多々ありましたが、先輩方の指摘や評を頂きながら、又、山本友一先生のご指導の下、ばばりょうこ氏の勧めもあり、平成十年に第一歌集『赤い靴』を上梓いたしました。何よりも故山本友一先生に序文をいただいたことは身に余る光栄でした。

・脱げぬこと約せし赤き靴履きてテンポ一つを遅れて踊る

歌作りを通して人や動物や自然を観察することがいつしか身につき、自分を客観視するための手立てとして短歌は大きな役割を果たしてくれたのです。

奇しくも今年、六度目の年女、セカンドキャリアとして再就職し十二年が経過しようとしています。心身ともに健康で働き続けることができることに繋がったのではないかと、短歌に誘って下さった方々に心から感謝申し上げます。

・かんしゃくのくの字を捨ててただ感謝老いを生き行く知恵とぞ覚ゆ

# 作品 A (ア行)

青田不二子 風

・ 湾

秋空に赤く熟れたる柿の実は空き家の庭に採る人もなく  
 晩秋の庭に咲く菊の花揺らし時には強く風は吹くなり  
 冬枯れのはじまる頃の庭隅に春まで待てと球根植える  
 銀杏の葉風の流れに散りはじむ残れる細枝は羽撃くがに見ゆ  
 めずらしき蝶が一匹地に止まり風のまにまにゆっくり飛びたつ  
 遠くよりわれを見つけし幼子は「あのね、きょうね」と嬉しげの話を  
 義兄の忌に集える姉妹は思い出の話も止まらず古希過ぎてより

秋山裕子 吊るし柿

・ 茨

朝夕に具合みつめる吊るし柿食を楽しみ今年もつくる  
 山路行き赤赤燃える紅葉の葉社殿を背にせし鷺子神社に  
 岸を被う波頭の上の佐渡ヶ島ゆれることなく泰然と在す  
 大空と海とを分かたつ夕焼は静寂深めた消えて行く  
 刻々と茜深まる地平線名だたる夕陽村上の宿  
 返り花「桜を見る会」また不意に桜咲き出し大騒ぎする  
 桜咲くまた咲き出してこの疑惑花の開き方しっかり目を凝らす

阿尻みさを 人生

・ 海

澄みわたる青空あふぎ杉の木の緑葉さやか終のすみ家の  
 軋動族東に西に家族四人、絆に守られ幸せに来し  
 むことりの吾の生涯ほのぼのと祖母・父母・子・孫さやかに生く  
 九十一歳第二次大戦体験者 悲惨のかの日夢の日のこと  
 高度成長はなやき幸せ子育てと孫ら四人との理想の日日  
 突然のコロナ騒ぎの不安なる地球の現象のりこえゆかねば  
 子や孫の世代よ何とぞ宇宙平和・理想の地球の実現可能に!!

阿部洋子 節目十年

・ 湾

実を結びフェンスにまとう白あけび熟れる果肉は薄いペールに  
 蔓ものの繋ぐ命は下向きに咲きて愛しき雄蕊に雌蕊  
 窓越しの飛び交う蜂は雨天にまとうり育つ自然のならい  
 十月の風を嗅ぎ分け黒い虫口のほころぶ熟れしあけびに  
 競艶の三春の春の滝桜大地に響くは老樹の木霊か  
 滝桜の苗木に雑じりし白あけび物珍しさに心奪わる  
 人生の齢は賦章十年の節目に実となる白あけびよ

虚子の墓処たずねてのぼる石段きだの何某家墓地鎖に閉じて

竹藪の中なる道はなお暗く松山びとの句を道づれに

源氏山やぐらの中にひそと在る虚子庵高吟居士なるお墓

句謡会終えての数日逝きしとう八十五歳釈迦誕生の日に

父虚子の見守る位置に設えし立子の句碑を秋は包みぬ

立子詠みし「道をしへ」の句にいざなわれ古都源氏山その墓場まで

「ふと命惜しむ」なる句の立子の碑万両の朱実かたわらに添う

道ぞいの祠政子と実朝の親子の哀れ山うがに穿てり

この道にうち重なりし益荒男の魂は如何もみじ声なく

実朝をいとしみたりし定家あり参道の並木ふと仰ぐとき

磨かれしガラス戸暗き方丈に夕ぐれはやき外灯ともる

鎌倉の秋天に浮く昼の月砂粒一つほどのわが世に